

(PDF版・2の7)『教会教義学 神論Ⅰ／1 神の認識』「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」「二 人間の前での神」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」「二 人間の前での神」(55-114頁)

「二 人間の前での神」

われわれは、区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」(「神の本質の問題」)を包括した「第一の問題」である「神の存在を問う問い」(「神の存在の問題」)を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「人間を人間自身からではなく」、「神ご自身によって〔先行する〕神の前に置かれた〔後続する〕人間として理解し」、「この神と人間を、何らかの自分勝手な前提からではなく、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の〕神の言葉が指示するところから従って理解した」。したがって、われわれは、その「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っているイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神の業を念頭に置きつつ、……神認識の遂行を、……ただ〔自己自身である神〕としての〈神ご自身の〉存在および行為として〔換言すれば、「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における「三度別様」な「三つの存在の仕方」、すなわち起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造主、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉(起源的な第一の形態の神の言葉)・和解主、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性)の関係と構造(秩序性)・救済主なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体として]理解し記述して行くということを、……最後に企てることができるし、企てなければならない。したがってまた、自己自身である神としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、「われわれのための神」としての「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事)、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的

な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの間人イエス・キリストにおける「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っていることからして、キリストにあっての神としての「神は、現にあるところのものであり給い、また現になすことをないし給う神である」、「ご自身を告げ知らせ・行動し給う神である」。そのイエス・キリストにおける「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っていることからして、キリストにあっての神としての「神は、ただ神によってだけ認識されるという命題」は、「人間的な認識能力のこのあるいはあの理解によって基礎づけられ、それから導き出されるのではない」。キリストにあっての神としての「神は、そのみ言葉の中で〔すなわち、先行して、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉の中で〕、〔それ故に、神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて〕人間に向かって〈語り給う〉」、「そのことでもって、神は、ご自身を認識するよう与え給うのであり、そのこと中で、〔「そのように先行する神に後続するという仕方です」〕神は認識されるのである」、「そのような仕方です、人間に向かって語り給う方として、神は、人間の前に立ち給う。また、人間が神の前に立ち、〔起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基づいて、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である「イエス・キリストの教会で起こっているように」〕人間の側で、神について語り・聞くことができるということにまで至るのである」。

区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」（「神の本質の問題」）を包括した「第一の問題」である「神の存在を問う問い」（「神の存在の問題」）を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っているのであるから、キリストにあっての神としての「神は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である〕そのみ言葉の中で、〔「人間に向かって何かあるものについて語るのではなく」、人間に向かって〕〈ご自身について〉語り給う」。イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における「自己証明によれば、人間の主である方」は、「もしもその方が、その自己証明によって、事実そのような方であるあるならば、もしもその方が、その自己証明を、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である〕その言葉を通して、またその言葉を通して基礎づけられた人間との契約の中で、有無を言わずに心服させながらなし給うのであれば、もしもその方が、人間に対して、その方の自己証明の中で、……人間がそれに対してそのほかのいかなる真理も対置させることができず〔人

間がそれに対してそのほかのいかなる一般的真理も対置させることができず（何故ならば、われわれ人間の、その個と現存性——類と歴史性の生誕から死までのすべてを見渡せ、また「教会の宣教における福音が、理念へと、有神論的形而上学へと、われわれに管理されるプログラムへと、鋭さをなくした十字架象徴論へと、イエス・キリストはたかだかく暗号>にすぎない神秘主義へと変わって行く」（『ヨブ』））ことが見渡せ、また全世界としてのそのような教会自身と「この世の偽り、通俗の偽りを偽りと呼び」、そのほかの例えば人文科学における、また自然科学における万物に質量を与える根元であるヒッグス粒子の概念やiPS細胞に関する科学や技術の進歩発達における「世俗的真理をも正直に受け取ることができる場所」は、まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける啓示の場所だけだからである〕、そればかりかその光の中で、人間はすべてのほかの名目上の真理を虚偽として認識しなければならない真理を啓示されるのであれば、もしもその方の言葉が、……それと並んでほかのいかなる真理も存在しない真理、それを通してすべてのその他の名目上の真理が裁かれる真理であるならば、「その時、その自己証明をなす方は、ただ単にその自己証明の中でだけ主であるのではない」。「したがって、<一人の>主そのものが、人間と結んだ契約の中で、自分自身を告げ知らせ・自ら行使することによって、確かに実証するであろう<一つの>権利と<一つの>力を備えた<一人の>主である」。

『教会教義学 神の言葉』によれば、「自由、主権は神ご自身においてのみ実在であり真理である」。「最高の、一つの、本来的な主権としての神の主権、換言すればその方の告知と行為〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における三度別様の「三つの存在の仕方」における告知と行為〕の中で啓示され力を発揮するその同じ主権のその内的な真理、そしてまた主としての、その主としてのその方の自己証明の内的な真理〔すなわち、「神の領域の中での神ご自身の真理」、ご自身の中での神としての神、自己自身である神としての神は、ご自分を、自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の<内>三位一体的主性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」であるという内的な真理〕、それと共にまた、その内的な力は、……その方が<三位一体の神>であり、自分自身の中で、永遠から永遠にわたって父、子、聖霊なる神であるということである〔すなわち、自分自身の中で、「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする父、子、聖霊なる神であるということである〕。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「その方の自己証明によれば、人間は、すべてにおいて、その方のおかげを受けており、その方にすべてを負っているということ」は、「神ご自身の永遠的な<父であること>に基づいている

〔すなわち、そのことは、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「父なる名の〈内〉三位一的特殊性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の根源・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし自己啓示する神として自分自身が根源」であり、それ故に「その区別された子は、父が根源であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源である」ことからして、「神ご自身の永遠的な父であること」に基づいている〕。したがって、「すべてのそのほかの父」は、「神ご自身の永遠的な父……に基づいている」。『教会教義学 神の言葉』では、「内被造世界での、……父という呼び名は確かに真実であるが、非本来的なものであり、神の〈内〉三位一体的父の名の力と威厳に依存しているものとして理解されなければならない」と述べられている。したがって、「その方の自己証明は、われわれを〔その方に対して〕〈感謝と義務を負う在り方〉へと強いる。そのようにして、その方の自己証明は、父なる神をわれわれの主として認識する認識に向かつて強いる。何故ならば、〔自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な自己自身である〕神は、永遠に、ご自身の永遠のみ子の父であり給い、またこのみ子と共に聖霊の起源であり給うからである」。「さらに、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕その方の自己証明によれば、〔「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の〕神ご自身がすべてであり、まさに神に対してすべてを負い続ける人間のために〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方（父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）において〕すべてをなし給うということ」は、「神ご自身の中で、永遠にわたって父の〈子〉であり、永遠にわたって子としてのイエス・キリスト自身は子であるにも拘らず、子であることによって、父と等しく、それ故に永遠にわたって父に愛され給うということに基づいている」。したがって、「その方の自己証明は、われわれを、その方の〈忠実さ〉と〈恵み〉を伏し拝み、そのようにしてわれわれの主としてのみ子なる神を認識するよう強いる。何故ならば、〔自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な自己自身である〕神は、永遠にわたって父から生れ、父と一つであるみ子であり、またみ子と共に聖霊の起源であり給うからである」。「最後に、その方の自己証明によれば、神は、われわれがすべてを待ち望まなければならない方であるということ」は、「〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の〕神ご自身が、永遠にわたって〈聖霊〉であり給い、父と子より出で、父と子と同じ本質を持ち給うということに基づいている」。何故ならば、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「父なる名の〈内〉三位一的特殊性」・「三位相互内

在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の根源・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし自己啓示する神として自分自身が根源」であり、それ故に「その区別された子は、父が根源であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源である」からである。したがって、「**その方の自己証明は、われわれを<希望>へと、そのようにして聖霊の認識に向かって強いる。**何故ならば、神は、永遠にわたって父ト子ヨリ出ズル聖霊であり、愛にあつての父と子の一致であり給うからである〔すなわち、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての「聖霊は、その交わりの中で、父は子の父、言葉の語り手であり、子は父の子、語り手の言葉であるところの「行為」（・性質・働き・業・行動・活動）である」、「ここに、神は愛、愛は神であることの根拠がある。愛は神にとって、最高の法則であり、最後のな実在である」からである〕」、ちょうど「救済を〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて〕信仰の中で持つことは〔すなわち、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事の中で持つことは〕、約束として持つことである。われわれはわれわれの未来の存在を信じる。われわれは死の谷のさ中であつて、永遠の生命を信じる。この未来性の中で、われわれは永遠の生命を持ち所有する。この信仰の確実性は、希望の確実性である。新約聖書によれば、神の恵みの賜物である聖霊を受け満たされた人は、召されていること、和解されていること、義とされ、聖とされ、救われていることについて語る時、すでにといまだにおいて終末論的に語る。ここで、終末論的には、われわれの経験と感性にとっての<いまだ>であり〔すなわち、人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍にとっての<いまだ>であり〕、〔神の側の真実としてある〕成就と執行、永遠の実在として<すでに>ということである」ように。「**その方の自己証明**」は〔すなわち、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方（父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）における自己証明は〕、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である「**そのみ言葉を通して人間と結ばれた契約の中で、契約と共になされる神の告知と行動**」は、〔自己自身である神としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の〕<神ご自身の>中に基づいており、そのようにしてその方の自己証明は、力強く、有無を言わず人を心服させるのである」。キリストにあつての神としての「神が、ご自身の中で〔自己自身の中で〕、三位一体の神であり給うが故に、われわれは、〔「われわれのための神」

としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、すなわち第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕その言葉の中ででも、また〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方における〕創造、和解、救済のみ業の中ででも、〔「自己自身である神」である〕神ご自身と取り組まなければならない、それ故にわれわれは、〔区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質の問題」を包括した「第一の問題」である「神の存在の問題」を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、キリストにあつての神としての〕神との出会いが意味しているところの決断を、……延期する可能性を持たないのである。「そして、神は、ご自身の中で三位一体の神であり給うが故に、われわれは、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である〕その神の言葉の中で、最後の決定的な、凌駕されることのない、ほかと競り合うことのできない神の啓示と関わらなければならないのであり、それ故にわれわれにとってはまた、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕その主と並ぶ、その主の上にあるそのほかの主を問う可能性は、すべての側に向かつて断ち切られているのである」。このような訳で、自己自身である神としての「三位一体の神の生としての〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方における〕神の生の中で、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である〕そのみ言葉の中での神の業〔・働き・行為、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体〕は、最高の、唯一の、本来的な支配であり、その支配の中で神は、ご自身を、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて〕認識すべく与え、また認識され給うということ〕は、「ここでの秩序であり、またそのことは必然であるのである」。『教会教義学 神の言葉』では、次のように述べられている——第二の形態の神の言葉である「聖書は、先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕としての〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストと共に、教会の宣教における原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕である」、それ故に「教会に宣教を義務づけている」第二の形態の神の言葉である「聖書こそが〔第三の形態の神の言葉である〕教会を支配するのであって、教会が聖書を支配してはならないのである」、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である「イエス・キリストが、われわれ人間に対して、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である〕聖書および〔その聖書を、「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と

実際』)に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である] 教会の宣教を通して同時的となる時と所、『神われらと共に』が神ご自身によって〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、〕われわれに語られるところにおいては、われわれは、神の支配のもとに入ることを承認し確認する」、また「われわれは、世、歴史、社会を、その中でキリストが生まれ、死に、甦られたところの世、歴史、社会として承認し確認する」、また「われわれは、自然の光の中でではなく、恵みの光の中で、それ自身で閉じられ、かくまわれた世俗性は存在せず、ただ神の言葉、福音、神の要求、判定〔「裁き」〕、祝福によって問いに付され、ただ暫時的にだけ、ただ限界の中でだけ、それ自身の法則性とそれ自身の神々に委ねられた世俗性があるだけであることを承認し確認する」、と。

「まさにそのところからして、今やまた神〈認識〉の問題がもう一度全く新しく展開されなければならない」。常に先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」ができてきているところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」(『ローマ書』)であり、「永遠の(神との人間の)和解」(徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、神の側からする神の人間との架橋)であり、「神との間の平和」(ローマ五・一)であり、それ故に神の認識可能性である「自己自身である神」としての聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉で、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かつての、したがって神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かつての人間の用意が存在する」ということからして、キリストにあっての神としての「神が、〔先行して〕人間の前に立ち給い、ご自身を〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて〕人間に対して認識すべく与え、人間によって認識されるということがまことであるとするならば、その時そのことは、神は三位一体の神、〔「三位相互在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする〕父、子、聖霊なる神であるということに基づいてまことであり、またそのことの中でまことである」、ちょうどその「外に向かつて」の外在的な第二の存在の仕方における「啓示と和解がキリストの神性の根拠ではなくて、〔その内在的本質である〕キリストの

神性が啓示と和解を生じさせる」ように、「赦す神」はたとえその人がまことの人間であっても人間に内在することは決してないように。「**先ず第一に**、〔「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の〕**神が**、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方において〕**<われわれの前に>立ち給う真理の内部の中で、神は、<ご自身>の前に立ち給う。父は子の前に、子は父の前に立ち給う**」。「また、**先ず第一に**、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて〕**われわれが神を認識する真理の内部で、神は、ご自身を認識し給う**〔ご自身の中での神としての神は、すなわち自己自身である神としての神は、ご自分を、自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の<内>三位一体的主性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」として自己認識し給う〕。父は子を、子は父を、〔神的愛に基づく父と子の交わりとしての〕**聖霊の一致の中で認識し給う**〔自己認識し給う〕。〔「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の〕**神ご自身の中でのこの出来事は、われわれの神認識の本質であり力である**。〔「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという<方式>の下で、〕それは、……〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉である〕その言葉を通してわれわれに知らされた出来事である。しかし、それは、もちろん隠れた出来事、換言すればそれに人間はそれとしてそのままあずかって<おら>ず、〔それ故に〕人間は、それに神の啓示を通して初めてあずるようになる<出来事>、それ故に人間からしては理解を絶した仕方であずかるようになる<出来事>である」。神のその都度の自由な恵みの神的決断によるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいた「**われわれの神認識**〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕は、……〔「自己自身である神」としての〕**神が、ご自身を認識し給う**〔自己認識し給う〕**三位一体の神であるということの力で、真理を持つようになる**」ことからして、「**事実真理を、ただその内的な真理**〔「**神の領域の中での神ご自身の真理**」、ご自身の中での神としての神は、自己自身である神としての神は、ご自分を、自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の<内>三位一体的主性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」であるという内的な真理〕の**外面として持つようになる**」ことから



して、「われわれがそれにあずかるようになるということは、……自明的なことではない」。「われわれが、〔キリストにあつての神としての〕神を、その啓示を通してわれわれに贈り与えられた認識の故に、ほめたたえ・讚美するとすれば、その時そのことは、われわれが、〔キリストにあつての神としての〕神を、……すべての神認識が、あらゆる事情の下で現実に起こることができるその神の自己認識の隠れ〔・隠蔽・秘義〕の中で、ほめたたえ・讚美するということを意味しなければならない」。言い換えれば、「派生的な副次的な仕方で、被造物世界の領域の中で起こる神認識は、そもそも神認識が、……神の領域の中で、……まず第一に、それ自身で、われわれなしに、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて〕現実に起こっているということに基づいて起こるのである」。

「われわれは、そこで、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体としての〕神を愛することが許されているが故に、〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」としての〕神を恐れなければならない必然性、神がご自身をわれわれに向かつて明らかな確かなものとし給うたが故に、われわれはその秘義の中での神をうやまわなければならない必然性の根の前に立つ。「その際、愛と明かさと確かさは、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体としての〕神が、ご自身をわれわれに対して現にあり給うところのものとして啓示し給う〉ということと関連している」、「恐れと秘義は、〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」としての〕神が、ご自身を現に〈あり給う〉方として、換言すれば先ず第一にご自身をわれわれのための神認識のあの内的真理〔「神の領域の中での神ご自身の真理」、ご自身の中での神としての神は、自己自身である神としての神は、ご自分を、自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的主性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」であるという内的な真理〕の中で認識し給う方として、われわれに啓示し給

うということと関連している」。また、「前に、神の<対象性>なしには、いかなる<神認識>もないということを見た」「われわれは、そこで、神の対象性の問題の根の前に立つ。その対象性を、〔区別を包括した単一性における、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質の問題」を包括した「第一の問題」である「神の存在の問題」を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、〕われわれは、さし当って先ず神の啓示の中に、そのみ業のしるしの中に、被造物的領域の中でのその隠れと顕われの中に尋ね求め」なければならないことは明らかであるから、「その問題にもう一度戻って行かなければならない……」。

われわれは、「神<ご自身>の対象性なしにはいかなる神認識もなく、ご自身をわれわれに啓示される方の<主要な>対象性の真理なしには〔「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「ただイエス・キリストの<名>だけ」（最初の起源的な支配的なくしるし）、主要な対象性）、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>、換言すれば神のその都度の自由な恵みの神的決断による、客観的な「存在的なく必然性」と主観的な「認識的なく必然性」を前提条件とした主観的な「認識的なくラチオ性」と客観的な「存在的なくラチオ性」——すなわち三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」、イエス・キリスト自身によって直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由」によって賦与され装備された「権威と自由を持つ」預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」（「啓示との<間接的同一性>」、啓示との区別を包括した同一性において存在しているその最初の直接的な第一の「啓示の<しるし>」）としての第二の形態の神の言葉である聖書、その「聖書への絶対的信頼」に基づいてその聖書を自らの

思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした教会の〈客観的な〉信仰告白および教義Credoとしての第三の形態の神の言葉である教会の宣教なしには)、その啓示の中でのその方の〈副次的な〉対象性の真理はないということを見

た。「まさに神ご自身の主要な対象性こそが、父、子、聖霊としてのその永遠的な存在の中での〔その「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神としてのその永遠的な存在の中での〕**実在である**〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われぬ差異性」における三度別様な三つの存在の仕方、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体である〕」。

「三位一体の神としての神は、先ず第一にとりわけ、ご自身に対して対象的であり給う」(第二段落目を参照されたし)。このような訳で、「神が、ご自身の領域の中で、自分自身に対して対象的であり給うということに基づいて、被造物的領域の中で、またわれわれに対しても対象的となり給う時、そのことは、その神的本質の否定や放棄を意味しない」のであり、そのことは、「その神的本質の確認と実証〔自己認識と自己証明〕を意味しているのである」。したがって、区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質の問題」を包括した「第一の問題」である「神の存在の問題」を要求するイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「われわれは、そのみ業とするしの中で」、「先ず第一に、われわれなしに、ご自身にとって対象的であり給う」「神ご自身を……認識することができるし、認識すべきである」。しかし、「そのみ業とするしの中での現われ〔神の顕現〕は、われわれにとって常にまた神の隠れ〔神の隠蔽〕を意味しており、神が啓示されてい給うということは、常にまた神が隠れい給うということ、神への愛は神への恐れなしにはあり得ないということ、神の現実存在のわれわれに贈り与えられた明らかさと確実さは神が依然として秘義であり続け給うこと」である。バルトは、『教会教義学 神の言葉』で、次のように述べている——「人々は人の子(あるいはわたし)は誰であると言っているか」(マタイ一六・一三)と聞かれ、ペテロ(教会の信仰告白)は『あなたは生ける神の子キリストです』と答えた。『メシヤの名』に対する『人の子』というイエスの自己称号は、(覆いをとるのではなくて)覆い隠す働きをする要素として、理解する方がよい。逆に、使徒行伝一〇・三六でケリグマが直ちに、すべての者の主なるイエス・キリストという主張で始められている時、それはメシヤの秘義を解き明かしつつ述べているというように理解した方がよい」。内在的本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かって」の外在的な第二の存在の仕方における言葉の「受肉、神が人間となる、僕の姿、自分を空しくすること、受難、卑下は、神性の放棄や神性の減少を意味するのではなく、神的姿の隠蔽、覆い隠しを意味している」、イエス・キリストは「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神(「顕ワサレタ神」、神

の顕われ、神の顕現) にしてまことの人間(「隠サレタ神」、神の隠れ、神の隠蔽)である、と。

そのような訳で、「その脈絡の中で、……〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における三度別様な三つの存在の仕方における〕そのみ業とするしの中で神が啓示され給うということと矛盾しつつ、〔「自己自身である神」としての聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の〕神の完全な隠れについて、それ故に神は認識されないこと〔「神の不把握性」〕について語られている聖書の言葉が理解されなければならない、「ああ深いか、神の知恵と知識との富は。その裁きは窮めがたく、その道は測りがたい。だれが、主の心をしていたか。だれが、主の計画にあずかったか」と述べている「旧約聖書の箇所、エレミヤ二三・一八、イザヤ四〇・一三―一四、ヨブ一五・八のことを考えている」「パウロが、ローマー一・三三以下で取り上げた……聖書の言葉が理解されなければならない」。われわれは、「神は、『近づきがたい光の中に住み、人間の中で誰も見た者がなく、見ることもできなかつた方』と述べている「Iテモテ六・一六)」のことを考えている、また「『神を見た者はまだひとりもない』と断言的な言明」をしている「ヨハネ一・一八」や「神を見た者は、まだひとりもない」と述べている「Iヨハネ四・一二」のことを考えている。「われわれは、ヨハネ五・三七の『あなたがたは、まだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない』という言い方のこと、またヨハネ六・四六の『神から出た者のほかに、だれかが父を見たのではない。その者だけが父を見たのである』という言い方のことを考えている」——その「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っているイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「この最後の言葉こそ、事柄を正しい光の中に移し入れるのに適当な言葉である」。「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の「神から出た者、み子は〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身は〕、確かに父を見たのである」。「われわれは、ヨハネ一・一八の続きの部分で、『ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが神を顕わしたのである』と書かれているのを読む」。「それと一致して、ヨハネ八・一九には『あなたがたは、わたしをもわたしの父をも知っていない。もしあなたがたがわたしを知っていたなら、わたしの父をも知っていたであろう』とあり、マタイ一・二七には『子を知る者は父のほかになく、父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者〔「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である子としてのイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別

に召され任命されたその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」としての第二の形態の神の言葉である預言者および使徒たち]とのほかに、だれもありません』とある。「さらにまた、ヨハネ一〇・一四以下には、『わたしの羊はまた、わたしを知っている。それは、ちょうど父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである』と書かれている。それは、〔啓示者である〕父がみ子を通して啓示されるように、〔啓示・語り手の言葉である〕み子もまたただ〔啓示者・言葉の語り手である〕父によってだけ啓示されるからである（マタイ一六・一七）」。「ここで、Iコリント二・九一―二が付け加えられることができる」——「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた。そして、それを、神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊は、すべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように、神の思いも、神の御霊以外には、知る者はない。ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって神から賜った恵みを悟るためである」、ちょうど信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事は、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞、神のその都度の自由な恵みの神的決断による、客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」（客観的な「存在的なく必然性＞）」とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（主観的な「認識的なく必然性＞）」を前提条件とした（神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた）主観的な「認識的なくラチオ性＞」（徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性と客観的な「存在的なくラチオ性＞」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）に基づいて与えられるように。このことは、「神の自己認識、聖霊の在り方を通しての父と子の在り方の中での神ご自身の起源的な対象性に基づいている」。「しかし。そのことは、……われわれが、『神からわれわれに贈り与えられたもの』を用いることによって、それ故に神を愛し、また神ご自身のあますところのない真理の明らかなさと確かさの中で、神を認識してよいという許しを用いることによって、われわれは、神が永遠から永遠にわたって、われわれの認識行為に対し、神が、起源的な真理そのものの中でご自身を認識される〔自己認識される〕ことによって、われわれの認識行為

にその真理を与え給う方として〔先行して〕〈先立ち行き給う〉……ことに基づいて、われわれが、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて〕神がその啓示の中でわれわれをその出来事にあずからしめることによって、われわれの被造物的な場所の中で、神の真理を良しとし給う仕方で、知覚し、直観と概念を用いて把握しつつ、〔後続して〕〈あとに従う〉ことが許されることに対して、感謝をするのをやめることができないということを意味している」。このような訳で、バルトは、『バルトとの対話』で、次のように述べている——「われわれが哲学的用語を使うという事実にもかかわらず、神学は哲学的試みが終わるところから始まる」、すなわち神学も人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使した知的営為ではあるが、「神学は方法論的には、ほかの学問のもとで何も学ぶことはない」、と。したがって、例えば、マルクスの自然哲学、天台本覚論、農耕を主たる経済的基盤とした人類史のアジア的段階における自然を内面の原理とした禅的概念を駆使しての滝沢克己の「もはやいかなるキリスト者も、〔その最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示の〈しるし〉）としての第二の形態の神の言葉である〕『聖書』や〔「啓示ないし和解の实在」（「最初の起源的な支配的な〈しるし〉）そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕『イエス・キリスト』という名を記憶している人たちさえも、もはやこの地上のどこにも残っていないとしても、それでもなお、『神われらとともに』という事実〔これは、未だ区別や分節化がされていない未分化のまま一切が包摂された総合状態、無規定の状態、「無」性状態、それ故に一切の区別や規定性や分節化の源泉でもあるところの自然や宇宙の概念と同質のものである〕にわたしたちが堅く結びつけられているということそのことは、〔滝沢の自由な理性が対象化し客体化した人間的自然（観念的生産物）としての滝沢の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、存在者レベルでの〕神において永遠に決定されていることなのだ」（『カール・バルト研究』）という思惟と語りに対しては、それは、人間的自然に依拠した自然神学、「人間学の後追い知識」として自然神学の段階で停滞し循環する思惟と語りの水準にあるものであるから、ハイデggerからは「それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受け入れた方がよい』」と「揶揄」されてしまうだろう、またフォイエルバッハからはその「（中略）神の啓示の内容は、神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。 （中略）こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」と、客観的な正当性と妥当性をもって根本的に包括的に原理的に批判されてしまうであろう。